

\* これは実際の試験問題ではありません。  
(This is NOT the actual test.)

No.000001

受験番号				
------	--	--	--	--

学習能力考査

社 会 科 学

資料及び問題

指示

係りの指示があるまでは絶対に中を開けないこと

0. ICUに合格したら入学すること。(笑)
1. この考査は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができたかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に40の問い(1-40)があります。
3. 考査時間は、「考査はじめ」の合図があつてから正味90分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて90分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります答えが指示どおりでないと、たとえそれが正解であっても無効になりますから、解答の仕方をよく理解してから始めてください。
5. 答えはすべて、この冊子といっしょに配られる解答用カードの定められたところに、指示どおりに鉛筆を用いて書きいれてください。一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれいに消してから、あらためて正しい答えを書いてください。
6. もしなにか書く必要があるときは、必ずこの冊子の余白を用い、解答用カードには絶対に書き入れないでください。この冊子以外の紙の使用は許されません。
7. 「考査やめ」の合図があつたらただちにやめて、この冊子と解答用カードとを係りが集め終わるまで待ってください。集める前に退場したり用紙をもちだすことは、絶対に許されません。
8. 指示について質問があるときは、係りに聞いてください。ただし資料と問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答用カードの定められたところに忘れずに書き入れること

## I. はじめに

今日の日本社会において政治のイメージは、一般的に言ってあまりよいものとはいえないであろう。例えば、われわれは「あの人は政治的だから嫌いだ」という言葉をしばしば耳にする。政治とは何か汚れたもの、腐敗したものという感じを多くの人々はもっている。しかし、よく考えてみると、政治は決してマイナスのイメージだけでないことがすぐに理解できる。例えば、政治の汚らわしさを語る同じ人が、異なった状況では「あの人の政治力はたいしたものだ」とか、「彼はとても政治的魅力的な人だ」と語る。政治は何か成熟した大人を感じさせるもの、何か人々を動かす力を秘めたもの、人間の生のきわめて重要な一領域であるという感触を、われわれはどこかにもっている。このように考えるとわれわれは、かなり漠然としたものではあるが、政治に関してマイナスとプラスの両方のイメージを抱いていることが分かる。政治という言葉を使う際に、無意識のうちに概念の使い分けをしているのに気がつくのである。したがって、厳密に言葉の用法を考えながら政治の概念を適用するためには、政治(1)あるいは政治(2) politics (1) politics (2)といった具合に限定的に使用しなければならないのではなかろうか。そうしないと、周囲を混乱させてしまうのではないと思われる。けれども、実際はこのような限定なしでも、十分に意図するところは通じており対話可能である。こうした事態がなぜ生ずるかといえれば、一つには政治という現象がそれ自体複雑な構造をもっているからだと説明できるであろう。つまり、政治とは決して単純な一枚岩のごとき現象ではなく、錯雑とした重層構造をもった生きた実態なのである。これは、政治の概念が幾多の時代的変遷を経て今日のわれわれの認識の中に定着し、また一定のイメージの中に作り上げられたものであり、いわば長い複雑な歴史の一所産だからである。各々の歴史的状況や環境、また各々の時代および社会が直面した焦眉の諸問題との葛藤を通じてさまざまな歴史的、社会的、思想的契機が相互に影響しあって、この政治という多面体を形成してきたといえよう。それ故、政治を研究する場合に、政治のどの層、どの局面に焦点を合わせて、今日の政治の現象を認識していくのか、最も重要な政治の局面は何なのかを規定する行為それ自体が、重要な選択であると言わざるをえない。というのも、それぞれの社会状況の中で政治をどのように捉え、政治をどのように定義していくかによって、いくつかの問題圏を浮かび上がらせることができ、また逆に同じ行為によっていくつかの問題圏が消失してしまうからである。しかし、このことはそれ自体一筋縄ではいかないことでもある。なぜなら、政治をどのように捉えるのかといっても、そこには事実としての政治認識と、将来の可能性としての政治のありうべき姿の模索の両面が見られるからである。今日の日本社会において政治は実際にどのような現象としてわれわれのもとにあるのだろうか。またたこうした状況の中でわれわれはどのような仕方で政治の理念を探究していったらよいだろうか。そして政治のマイナスのイメージが人々の心に焼きついている今日、それでもなおわれわれを政治へと駆り立てるものがあるとすれば、それはいったい何であろうか。これらの問題をしばらく共

に考えてみたい。

## II. 戦後社会と政治

それにしても、戦後四十二年を経過した今日の日本社会において政治のイメージがこれほど悪いのはなぜだろうか。日本を誤った軍国主義の道へと導いた戦前と戦中の政治のイメージをわれわれが今なお払拭しきれないためであろうか。それは一面、確かにその通りだといえよう。しかし、現在の日本は決していわゆる権威主義国家ではなく、理念的には少なくとも日本国憲法を基盤としながら民主政治を実現しようとしているはずである。そして民主主義とは、言うまでもなく政治を自らの手で創出していく高度に政治的な人間を前提とする政治体制である。しかし現実とはいえば、政治に背を向ける傾向が国民一般に定着しており、それ自体、民主主義にとっては一つの脅威であると言わざるをえない。

近代日本の歴史的脈絡においてみる時、こうした戦後の脱政治化（*depoliticization*）に関してはそれなりの説明が可能である。明治維新以降の「富国強兵」のイデオロギーが十五年戦争によって挫折し、脱軍事化されていったことは周知の事実である。そこで残ったのは「富国」主義だけであり、戦後の日本はもっぱら加工貿易国家として、原料の輸入、製品の輸出、生産、消費、開発などの経済活動を重視し、今では「経済大国」のレッテルを貼られるまでになった。そこでは経済至上主義（*ultra-economism*）と脱軍事化（*demilitarization*）とがワン・セットになり、一方において国民の脱政治化を促進し、他方において国民が総力を挙げて高度産業社会の拡充に専心してきたといえよう。近年、軍事費の GNP 比 1% 枠が取りはらわれ、戦後政治の基本的方針であった脱軍事化がかなり相対化される兆しを見せてきているが、しかし、従来の脱軍事化こそ、周辺世界に対して戦後日本の「無害化」を保証し、同時に防衛費への支出を極力押さえることを可能にし、日本経済の高度成長の基盤を形成するものであった。こうした中で日本人全般の生活関心は公的事柄から私的事柄へと移行し、政治的無関心と結びついた私生活主義が幅を効かせるようになった。こうしてかつての *homo militaris* は、いつのまにか *homo economicus*、ひいては *animal economicum* へと変貌し、日本独特の後期資本主義的商人社会が形成されていった。

こうした意味での経済至上主義は、今日の日本社会と日本人の価値志向を全般的に規定しているイデオロギーである。人間の行為様式の中で生産と消費を核とする経済の領域を最優先させるこのイデオロギーは、保守政党のみならず、革新政党や労働組合の価値観をも支配しており、大衆消費社会を駆動するモーターそのものである。今日、多くの日本人はまず生産と分配と流通と消費に従事する経済的人間として自らのアイデンティティーを規定することを余儀なくされている。確かにこうした事態は、古代ギリシア人にとって経

済活動としての労働が人間の生命維持と発展のための必然の行為様式であったことを想起させる。すなわち、経済活動は、「食べるために、また食べさせるために働く」という生活の必然のしからしめるものという一面を今なおもっている。しかし同時に、現代の日本人の多くは、近代資本主義の洗礼を受けた近代的経済人として、体系的な営利追求そのものにある種の英雄的行為の感触すら保持しているともいえよう。この側面は、古代ギリシアの「ポリス的人間」の状況とは本質的に異なったものといえるであろう。というのも、卓越した英雄的行為が探求される場合は、彼らにとっては経済というよりも、あくまでも政治であったからである。生命維持のための労働としての経済活動が行なわれるのは「家政」(oikia)であるが、それは、生活の必然の領域として、政治が探求される自由の領域である「ポリス」(polis)と対比されるのが常であった。いずれにしても、今日の日本社会においては、古代ギリシアの「ポリス的人間」や植民地時代および独立戦争の時代のアメリカや市民革命期の西欧諸国の人々の間で、政治という行為様式が「至高の」尊厳をかちえていたのとは著しく異なった状況が見られる。しかも、これらの政治的人間の場合、政治への共同参加には内側からの自然な動機づけがあり、そこに自由を見いだしていた。現代の日本人は、これとは異なり、政治に参加することの中に自由を追求するのではなく、むしろ政治に背を向けながら私的価値に没入することの中にこそ、自由があると考えている。そしてこの私的価値とは、多くの場合、レジャー産業によって画一的に供給される均質化された余暇と娯楽にほかならない。また現代の日本人が、その実感信仰に基づいて確かに自由だと考えることは、金があってもノを思い通りに蓄積できること、デパートでモノを買い集める消費的自由だと言っても間違いではないであろう。こうした中で人間が消費者としてではなく、市民として保持する自由、つまり一個の責任ある政治主体として公的事柄に積極的に係わる政治的自由は次第に風化していき、またこうした人間主体の価値意識を不断に作り上げていく内面的自由は骨抜きにされてしまう。経済至上主義のイデオロギーはさらに、戦後日本の「平和主義」の基本的性格をも規定しているといえる。なぜなら、今日の日本の平和主義は、その理念とは裏腹に国民の積極的な倫理的価値意識および勇気ある決意に基礎をおくものではなく、脱政治化された平和主義、京極純一氏の言葉を借りれば、「国際政治の外へ逃げ出して・・・自分たちだけは巻き込まれないで、自分たちだけはひっそりと幸せでいたい、という鎖国型の平和主義」(『日本人と政治』、1986年)だからである。これが、今日特に貿易不均衡や経済摩擦の問題をめぐって盛んに議論されている“The Japan Problem”と呼ばれる経済的、政治的、文化的、心理的問題の基盤となっている。

このような脱政治化された戦後社会において政治は存在しなくなったのかといえ、決してそうではない。戦後の政治は、経済至上主義のイデオロギーに追随する仕方で機能してきた。それは、政治学のボキャブラリーでいえば、経済的利益の権威的配分を中核とする利益政治(interest politics)と、権力にものを言わせて支配する権力政治(power

politics) の特殊日本的な結合体、すなわち金権政治 (money power politics) として結実したものにほかならない。そこでは「代議士」と「地元」の利害の一致を基盤としながら、投票と利権 (ないし金権) の交換を前提とした妥協の政治が成立している。戦後日本の一党支配体制の状況はこうした独特の政治を背景としてでき上がったものであり、田中型政治はこのような戦後政治のあり方を象徴するものであった。こうした政治風土において、一部の人々を除いて国民一般の間に政治へのアレルギー反応が強まり、また政治とは汚れたもの、腐敗したものであると見なされるに至ったのも自然の流れであった。しかし、このことは政党の質の悪さや職業政治家の意識の低さを慨嘆して済ますことのできる問題ではない。というのも、金や利権を地元にもたらさない政治家はナンセンスだという意識が蔓延する国民の中に本来の政治的市民像を探しても無駄だからである。確かに政治家に政治的指導力や判断力や英知よりも、金集めの能力や腹芸を期待する政治風土は、それ自体尋常ならざるものに相違ないが、結果としてこのような政治体質のつけは政治の主体である市民一人一人が支払うのが、民主政治の鉄則だという冷徹な事実を認識しなければならない。そうなる問題にすべきは、単に職業政治家のモラルの低さだけでなく、市民の政治的資質でもありと言わなければならない。

### III. 政治の最古層

そもそも政治は、今日の日本社会で考えられるほど、幻滅的なもの、汚れたものと認識されていたわけではなかった。政治は、もちろん人間が集合的生活を含むところではどこにでもあった行為様式であり、その意味で人類の歴史と共に太古から政治は存在したといえる。しかし、政治が他の行為様式とは区別される独自の存在基盤をもつものとして自覚され、人間の認識の対象として画定されたのは、紀元前五世紀のギリシアの都市国家 (ポリス) アテナイにおいてであった。ソクラテスは哲学の関心を宇宙や世界の成立やあり方の探究から、人間事象の探究へと一大転換をなすきっかけを作ったが、その画期的な転換の延長線上でプラトンやアリストテレスは、「政治的なもの」( *he politike* ) の探究に向かった。それ故、純粋に「政治的なもの」がその独自の姿、いわばその存在を開示し具現したのは、まさにこの時期のギリシアのポリスにおいてであった。その栄誉ある歴史の一時点においては、政治は人間生活の実存的基礎、最も大切な行為様式の一つとして認識され、いわば荘厳な建築学上の支柱としての位置づけが与えられたのである。またそこには「政治的人間」という新人種が生まれたが、この高度に政治的な存在は、言論と活動を基軸に共に創造的な政治的空間を構築しようとする願望を保持し、この願望をしばしの間とはいえ実現したのである。さらにまた政治学は、ポリスの公的事柄としての政治を学問的探究の対象とするものであるが、政治の至高性の認識の故に、威厳あるマスター・サイエンス (諸学の王) として理解された。この尊厳ある政治のイメージは、哲学者たちの著作にその影を落としているだけでなく、ヘロドトスやトゥキディデスなどの歴史家たちの

歴史叙述や詩人たちの物語や叙事詩などにもその痕跡をとどめている。こうした古代ギリシアの政治の理念こそ、その重層構造にみられる最古層の政治にほかならず、また後の時代の人々が危機の時代に常に立ち返ろうとした政治の原初的ヴィジョンであった。それ故、比喩的な表現を使うことを許されれば、古代ギリシアの政治は、決して考古学の対象として地下に深く眠っている過去の遺物ではなく、危機の時代、つまり社会の変動期や解体期に断層を通して突如としてその古層を現わす類のものであるといえよう。

アリストテレスは、この最古層の政治を厳密に認識しようとした最初の哲学者であった。「政治的なるもの」とは元来語義的には「ポリスに関する事柄、「ポリス的なるもの」を意味した。「政治的なるもの」とは、ポリスの全体性、一般性、公共性、共同性といった属性を自らの定義の中に包含している。さらに「政治的なるもの」は人間の倫理的な生活と密接不可分であり、市民たちの「善き生活」を志向するものであった。プラトンの『国家篇』も、アリストテレスの『政治学』も、政治と倫理の結合を前提としているという意味では共通し、政治の論理を宗教や道徳などいっさいの政治外的制約から解放しようとしてきた近代の政治思想一般とは際立った対比を示している。彼らにとって、人間は本来的に「ポリス的人間」にほかならず、人間の潜在的な能力が実現されるのは、決して個々の人間の孤立した状況においてではなく、ひとり創造的な公的空間としてのポリスにおいてであった。ポリスは、人間の集合的実存の究極の地平として、人為的かつ法的な共同体でありながらも、同時に精神的かつ倫理的な共同体でもあった。そのような意味でポリスは、人間にとって外面的な装置ないし機構としての性格を強くもつ近代国家とは質的に異なるものであった。ギリシアのポリスは「城壁」で囲まれた政治共同体であり、平均的には七〇平方マイル位の広さだったといわれている。例外的に大きなポリスとしてはコリントスやアテナイがあったが、それでも一平方マイル位であり、人口も、アテナイの全盛期の紀元前五世紀でさえ、通説によれば、婦人と子供を含めて十五万人位だったといわれる。アリストテレスは、理想的なポリスは「一目で見わたせる広さ」で、人々は互いに知りあっている範囲の広さだとしている。古代ギリシアの政治のヴィジョンは、近代的な意味での国家と社会の区別をもたないこのような小規模な共同体を前提としていた。奴隷や婦人や外国からの寄留者を除いた成年男子は市民 (*polites*) と呼ばれ、これらの市民が「自足的で、かつすべての事柄について究極的な権限」をもつポリスの構成員である。市民相互の間には自由と平等が保証されていたが、それはあくまでも政治に参加する上での政治的自由であり、また政治的平等であった。アリストテレスの「政治的動物」(*zoon politikon*) という表現は、こうした自由と平等を前提としながら、ロゴス (言論・理性) を媒介として複数の他者と交わり、討議や説得を通して、共通の公的事柄に共に係わっていく人間存在の政治性を示すものである。そこでは政治の本質は、自由で平等な市民の共同行為そのものであり、こうした市民の相互性に基づく自治の形成であった。人間の人為的に作り上げる領域として、政治は法の支配のもとにあり、諸個人のそれぞれの欲望によってではなく、ポ

リスの全体性の見地から公共の事柄を決定し、執行していく平等者の共同体である。ここで注目すべきは言論や説得やコミュニケーション、協調や共同行為という事柄が、「政治的なもの」の本質を構成するという考え方である。政治のギリシア的定義は今日でもある程度踏襲されていて、例えばわれわれは「軍事的解決」と対極にあるものとして「政治的解決」という表現を使う。それは、あからさまな暴力や強制力を用いずに、説得や話し合いや妥協や交渉などを通して問題の解決を計ろうとする行為を示している。政治はあくまでも、ロゴスによる共同の営みにほかならず、暴力は言論をもたないが故に反政治的であると捉えられた。ギリシア本来の定義からいえば、政治的力（political power）とは支配者が支配と統制のためにいわば強権的に上から発動する暴力（violence）ないし強制力（force）ではない。それはむしろ、市民相互が公的空間を作り上げるその共同行為の中から自ずと生成される市民共同体の力にほかならない。

H・アーレントは、ポリス型の政治的力の概念を重視しながら、近代の政治権力（political power）の奇怪さに光をあてている。近代においては、マキアヴェリやウェーバーやモーゲンソーなどの現実主義的伝統はもちろんのこと、政治的な右派も左派も、権威主義者も、民主主義者も、マルクス主義者も、ラスウェルやダールなどの行動科学的政治学の伝統も、政治権力を強制力（ないし暴力）と密接不可分なものに見なしてきた。ところがアーレントは、啓発的な著作『人間の条件』（1958年）において政治的力と暴力の質的差異に注視した。一方において政治的力は、常に複数の人々の協力関係から生まれる本質的に集団に帰属する力である。「力は、共に活動し言葉を交わす人々の間に現われるあの潜在的な出現の空間、すなわち公的領域を存続させるものにほかならない。・・・力を生成する唯一不可欠な物質的要因は、人々が共に生きることである。」こうした市民相互の共同生活から生まれる政治的力が創造し保持する公的領域こそ、ポリスにほかならず、それ故、「汝らの行く所はどこでも、汝らがポリスである」との有名な言葉はこの関連で理解されなければならない。これに対して暴力の方は、必ずしも集団に帰属せず、むしろ何かを実現するための手段という意味で道具的性格を帯びている。したがって「暴力は確かに政治的力を破壊することができたとしても、決してその代替物となることはできない。」（以上の引用文の出典は、『人間の条件』である。）暴力と政治的力とのこうした質的差異は、特に革命や政治的変動のプロセスにおいて明らかになる。F. ボルケナウなどの革命理論家たちの多くは、今日政府の保持する軍事力が急激に増強されたために、革命が生起する可能性は次第に少なくなってきたと主張するが、政府の保持する軍事力の大小は、革命期や動乱期にはあまり意味をもたないともいえる。というのも、政府の政治権力の行使が円滑に行なわれ、政府の命令が遵守されるのは、人民による同意と支持を得ている限りであって、その意味で政府の権威が維持される限りである。いったんその権威が崩壊し、人民の支持が揺らぐような場合には、巨大な軍事力はかえって既存の政府にとって命取りにすらなりえる。この事実は、最近ではハンガリー革命（1956年）やフィリピンの二月革命（1986年）

が如実に示したところである。人民の支持を失った時、政府は軍隊を自らの側に引きつけておく能力すら喪失し、軍隊は人民の側につく。人民の政治的力に裏づけられない支配機構の権力は無能である。このことは、二十世紀末の政治状況においてすら、ギリシア的な政治的力、市民共同体の力、人民の力のヴィジョンは有意性を失っていないことを示唆するものである。

#### IV. 近代の政治と政治権力の不可避性

古代ギリシアの政治のイメージを概括的に見てきたわけであるが、当時としてもこのように高度に理念化された政治のヴィジョンはあくまでも現実の一部を活写したものにすぎず、ポリスの現実の他面に光をあてれば、そこには今日的な意味での権力政治の様相を呈していたことは言うまでもない。それは特にポリスとポリスの間の関係、今日のいわゆる国際政治において顕著に見られた。上記の言論と活動による協調や共同行為を基本とするポリスの政治はその「城壁」の内側での政治の現実の一部にすぎず、「城壁」の外側ではあからさまな覇権主義や暴力支配が追求された。マキアヴェリ以降の近代の政治概念の貢献は、政治のもう一つの側面、つまり非合理的側面、政治に付着する何かきわどいもの、何か倫理的に曖昧なもの、何か汚らわしいものを直視し、それを政治の現実として客観的に分析の対象として措定した点にある。既述したように、近代の政治概念は、政治の本質を「支配」や「統制」として理解する試みであれ、また「紛争」や「対立」として捉える試みであれ、さらにそれを「調停」や「妥協」として認識する試みであれ、いずれも政治現象の背後に権力行使-そしてその極端な形態として物理的強制力=暴力の行使-を不可避的に前提としている。それは、近代の政治が国民国家という大規模な領土を前提とし、競合しあう種々の政治勢力の相克を止揚することを急務とした西欧近代の歴史的事情と無縁ではない。近代国家は、国家主権を確立し、それを保証するための強大な政治権力を要請した。それ故、国家は公的権力の一部である物理的強制力（具体的には警察権力および軍事力）を合法的に使用する排他的な権限を保持した。もちろんその場合でも、「最後の切り札」(ultima ratio)としての物理的強制力をむやみやたらに振り回すのは賢明ではなく、それを極力節約しながら、説得、妥協、交渉などを通して当初の目的を実現することこそ、卓越した政治術として見なされた。こうした近代の政治は、宗教や道徳と異なり、内面的な価値志向をそれ自体として問題としない。そこでは動機の問題よりも、徹頭徹尾結果が重視されるのである。国家の形成であれ、国家的統一の実現であれ、国家の維持と発展であれ、政治は現実の支配・被支配の関係に実際に影響を与え、現実を動かすものでなければならない。そこで支配の政治権力という問題が出てきたわけであり、マキアヴェリ、ボダン、ホッブズ、ロックなどの近代草創期の一連の政治思想家たちは、各々の観点から政治権力の問題を政治学的考察の中心に位置づけてきた。



さてこのような近代の政治概念や支配の権力概念を念頭にいれる時、そこでの政治や権力のイメージは必ずしもよいものとはいえない。権力イメージの悪さは古今東西を問わず、大なり小なりどこにでも見られると言っても、過言でないかもしれない。しかしその事情は、特にわれわれ日本人においてはなはだしいと思われる。それは、われわれの政治の伝統の中に、上記の古代ギリシアのポリス型の下からの政治的力の理念（一定の民主主義的ないし共和主義的な権力概念）がきわめて希薄であったことと無関係ではないであろう。わが国のタテ型の社会構造においては、政治は明治維新以降も、上からの統治として、お上のする業、上から所与として与えられるものという認識が、国民の中に牢固として定着している。それは、官尊民卑の風潮を作り出したと同時に、民衆の政治的主体性を突き崩す伝統の重圧として機能してきた。それ故、われわれは、英語の *political power* の用語を同一の日本語で表現することができないと感じてしまう。そして支配の権力の方を「政治権力」、市民相互の協力関係から生まれる下からの権力の方を「政治的力」と区別しながら、二つの異なった表記で示そうとする。日本語の「権力」のニュアンスは、英語の *power* のもつ幅広い意味合いを欠いている。しかし、権力イメージの「悪さ」だけを心情倫理的に強調するだけでは政治の現実を直視したことにはならないであろう。というのも、今日の政治の実態に直面した時、政治権力の不可避性 (*inevitability*) という問題がどうしても出てくるからである。

全体主義現象の研究者として著名な F. ノイマンは「歴史に記されたいかなる社会も、政治権力なしには済まされなかった」と述べているが、およそ政治現象と呼ばれるものの中心に権力現象あるいは権力関係が見られることは明らかである。それ故、B. ラッセルは『権力』(1938年)において、「あたかもエネルギーが物理学の根本概念であるのと同じ意味で、社会科学にとっては権力が根本概念である」と主張した。それでは近代的な意味における政治権力の不可避性はどのように説明できるであろうか。種々の説明が可能だと思われるが、ここでは三点にしぼって考えてみたい。第一の説明は、権力追求の心理的動機に着目するものである。アメリカの「シカゴ学派」の行動科学的政治学の伝統に立脚する H. D. ラスウェルは、フロイトの精神分析の手法を政治学に導入し、新たな政治学の学風を作り上げたが、この関連では特に『権力と人間』(1948年)が重要である。その中で彼は政治的人間の心理的動機を「権力への内的欲求」として理解し、そうした前提から権力追求のメカニズムを探ろうとした。そこで彼は、「価値剥奪」(*deprivation*) の「補完の手段」(*the means of compensation*) として、権力を精神分析の視点から理解しようとした。彼は歴史からさまざまな事実や逸話を取りだしながら、彼の理論を裏づけようとしたが、そこには興味深い議論が展開されている。例えば、彼はローマ皇帝ヴェスパシアヌスの例を引きあいに出して、身分の低い徴税人の出自たるヴェスパシアヌスが、貴族的なローマの先帝たちの仲間入りをするためにいかに刻苦努力した野心家であったかを紹介している。ここでラスウェルは、権力追求の動機の一つが、卑賤な身分の者が富や地位といった強大な

権力を獲得して、自己や家族の栄誉を求める場合に顕著に現われることを示している。さらに「価値剥奪」への「補完」として権力追求に邁進する例としては、自己や家族、また自分の属する部族への低い評価に打ちかとうとする場合を挙げている。その際、権力追求は多くの場合、自己よりも大きな集団の運命に自己を同一化させることによって使命感が与えられ、それがなお一層強められる点が指摘されている。例えば古代カルタゴのハンニバルであるが、彼は幼少の頃から、父親（カルタゴの将軍ハミルカル・バルカス）に、ローマへの激しい憎悪とカルタゴへの燃えるがごとき熱情を植えつけられた。また成吉思汗（ジンギスカン）の生涯は、幼少の頃から家門の復興を彼に託し、幾多の英雄物語を彼に語って育てた母親の影響に多くを依存していることはよく知られている。さらにまた身体的な劣等感と権力追求の関連の例としては、中国や近東の歴史における宦官の飽くことを知らぬ野望、ドイツのヴィルヘルム二世の「萎縮した腕」やテューダー王朝のエリザベス一世の女性的魅力の欠如が挙げられている。ラスウェルのアプローチは、政治権力の不可避性をこうした人間論的かつ心理学的観点から説明を試みたものとして注目に値する。

第二番目はオーソドックスな説明であるが、社会の統合の必要性から政治権力の不可避性を論ずる試みである。ここでは、「支配」、「統制」、「調停」の手段としての政治権力に焦点があてられる。近代国民国家は大規模社会を基盤として成立しており、そこにはたいていの場合、複数の民族、人種、エスニック・グループ、複数の宗教、政治的イデオロギーの信奉者、種々の階級および階層などが、混在している。こうした状況で無政府状態を回避し、ある一定の安定した政治秩序を形成するために支配的政治権力が要請される。この意味での政治権力は、例えば M. ウェーバーによって明確に認識された。彼は、命令する者が服従する者に対して自らの意志を課し、貫徹する力として政治権力を定義する。この定義に関して重要なのは、政治権力は本来的に支配権力にほかならず、それは支配者と被支配者の関係に依拠しているという前提である。しかも、一般的に言って、支配者は少数者であり（「少数支配の原理」）この少数の支配者が権力を独占することが前提とされている。彼らは、社会の統合を維持するために、官僚制、警察、軍隊といった権力装置を背景としながら権力を行使する。ところで支配者が支配の手段として用いるものはさまざまであり、従来いくつもの異なる分類がなされてきた。ここでは権力行使の道具を「合理的」手段と「超合理的」手段の二つのカテゴリーに分類し、後者の中の一つの形態を取り上げて考えてみたい。C. E. メリアムは、被支配者の非理性的側面-感情や感覚-に訴えて権力行使の正当化を試みる行為を「権力のミランダ」と呼んだ。これは、特定の民族の伝統や慣習や象徴体系の再編制を通して権力の神秘性を演出し、人々の同意や服従を勝ちとろうとする一種の権力操作である。ヒトラーが、この「権力のミランダ」を巧みに利用したことは周知の事実である。周到に準備され演出されたナチスの大衆集会、アーリア民族の血の神話に訴える手法、ユニフォームをまとい、戦車や無数の旗やのぼりを伴った整然たるナチスの行進などは、その消息を伝えている。例えば、ヒトラーは『わが闘争』（1925

- 27 年 ) の中でナチスの大集会の心理的効果を次のように記している。「人々は、新しい運動の支持者となる過程で孤独感を味わい、孤独の恐怖に襲われるが、大衆集会で初めて、より大きな共同体のイメージ(たいていの人々に強烈な影響力を与えるもの)をつかむことになる。この理由からだけでも、大衆集会は必要である。」今日においても、「権力のミランダ」は重要な役割を果たしている。多くの国々で、国家的英雄やカリスマ的指導者を国民の崇敬の対象とする慣習は根強く見られ、国旗や国歌や祭祀、神話や壮大な建築物など、「権力のミランダ」の対象となるものは少なくない。

政治権力の不可避性の第三番目の議論は、対抗権力( counter-power )の必要性である。これは、「権力は腐敗する。絶対的権力は絶対的に腐敗する」というアクトン卿の有名な格言と密接に関連している。権力が一人の支配者あるいは少数の支配者集団に集中すると、その権力は恣意的に私的利益の追求に利用されるようになる。このような権力の集中に対しては、それと対抗する力ないし権力を対峙させて、一定の均衡関係を樹立する必要がある。この対抗権力の必要性という考え方は、権力に対する不信、あるいは権力の担い手となる支配者に対する不信を前提としている。「勢力均衡」や「権力分立」という政治の主要な原則は、一つにはこうした不均衡な権力関係がもたらす不正ないし不平等の歯止めとして機能させるという意味があった。例えば「権力分立」の原則が出てくるのは、歴史的には絶対王制の解体のプロセスにおいてであり、権力の乱用を防止する制度的対応として生まれたことは明らかである。J. ロックは、イギリス革命の混乱の中で初めて立法権と執行権との分離を唱えた。モンテスキューは、ロックの議論をふまえて、その半世紀後に、フランスのアンシャン・レジームの崩壊の兆しを精確に感じとりながら、政治権力を、立法権、執行権、裁判権の三権に分立し、異なった担い手がそれぞれの権力の行使に携わることを提唱した。今日でも、対抗権力の必要性を前提とした議論は数多くなされている。一例を挙げれば、R. ニーバーによれば、民主主義の政治制度としての利点の一つは、民主主義的統治においては支配権力への批判と抵抗の原理が構造的、制度的に内実化されていることである。こういった考え方の背景にも、対抗権力の必要性という視点が確固として存在することは明らかである。

## V. 結びにかえて

これまでの議論の枠組みで見ると、今日の政治状況においては政府の政治権力と市民一般の政治的力の不均衡という問題が一つ大きくクローズ・アップされてくる。十九世紀的夜警国家観から今世紀三十年代から後半にかけての積極的行政国家観を経て、現段階ではコーポラティスト国家観が問題にされるようになった。もちろん一部では小さな政府への回帰を唱道する向きがないわけではないが、全体的にこうした国家の役割への期待が強まっている傾向は否定できない。こうした中で政治と経済の両方の領域における政府主導

の行為様式が今後ますます重要になり、また強まることは想像に難くないところである。したがって、統治の中枢に高度な専門的知識をもった官僚や種々の専門家やテクノクラートが集中する構造は、今後定着すると見た方が現実的であろう。このことの意味するところは、経済や科学技術がそうであったように、政治も、プロの果たす役割の重要性が増し、政治は一般市民の手からますます遠のいていくという事態である。ここで重要になってくるのは、政府の権力集中への対抗権力としての市民の政治的力の意義である。ところで市民あるいは人民の政治的力は、フランス語でいう *pouvoir* よりも、*puissance* としての性格をもったもの、すなわち一回的な行為能力よりも、継続的な潜在能力という意味合いが強い。その意味で市民の政治的力は、徹頭徹尾共同体的であり、市民相互の根強い関係と協力のネットワーク、人民の連帯から不断に生み出されるものである。それ故に、政治的力は、支配者が彼の意志を人民に一方的に押しつける時に生まれるものではなく、自由で平等な市民が公的事柄について共に討議し、まだ協力の関係を形成する時に生まれる。民主主義の中枢にはこのような市民として積極的に公的事柄に参与する政治的人間のヴィジョンがあるといえよう。しかしながら、今日いわゆる *citizenship* (市民性) は形骸的な抽象に終わってはいないだろうか。この概念の内実である政治的主体性は、空洞化されているのではないだろうか。この *citizenship* の無意味化こそ、現代の民主政治の中枢における深刻な危機ではないだろうか。

このような疑念を胸にしなが、今日、人々を政治に駆り立てるものがあるとすれば、それはいったい何なのかというもう一つの問いを発することは適切であろう。われわれは、アーレントが古代ギリシアのポリスの生活にかいま見、また A・ド・トクヴィルが植民地時代のニュー・イングランドのタウン・ミーティングに見たような情景、すなわち公的な場に共に参与する人々の喜びと満足をイメージ化することすら困難な時代に生きている。それでは今日の市民を公的な場、政治的領域に駆り立て、またそこに引き出すものは、果たしてあるのだろうか。この問いに対する解答は、さまざま考えられるであろう。最後に、この問いに肯定的な解答を与えることを前提とした上で、試案的ではあるが二つの事柄を簡単に取り上げてみたいと思う。一つは *compassio* の政治的徳性としての可能性である。日本語に本来的になじまない外国語の用語は種々あるが、この *compassio* というラテン語の言葉もその一つである。この *compassio* という言葉は、英語では *compassion* であり、通常、憐れみや同情という訳語があてられるが、憐れみや同情という日本語の語感には何か上から下を見下げる、あるいは恩を垂れるという含みの優越感がつきまとうように思われる。しかし、*compassio* は、もともとラテン語で「共に」を意味する *com-* という接頭語と、「苦しみ」ないし「受難」を意味する *passio* が結合したものであり、他者の苦しみへの共通感覚との意味で理解するのが適切である。さてそのような意味での *compassio* が、卓越した宗教的および道徳的徳性であることは誰も異論のないところであろう。しかし、歴史的に *compassio* は、政治的徳性としては無意味だと解釈される傾向にあった。事実、

西欧政治思想史の伝統においても、ヘブライズムの思想が脈々と息づいていたにも拘わらず、政治思想家たちはもっぱらロゴスの政治的機能の重要性を認識してきたのであり、パトスの政治的意義については語るべき多くの言葉をもちあわせていなかった。この点においては、J. J. ルソーが例外的に自然人に植え込まれている根源的性格の一つとして人間のパトスに高度な政治的潜在力を見ていた。これは、人間の内面的資質としてのルソーのピティエ (pitié) の概念である。ピティエは、自然状態にある人間が他者に感じる共通感覚であり、特に他者の苦しみを共有しようとするパトスである。今日、第三世界の厳しい抑圧的状况にある国々において、もともと政治的には無関心であった人々が社会正義や人権や解放のために政治的領域に参加しているが、そこに *compassio* と政治的意識との現代的結合を見ることは可能ではなからうか。また公害問題やエコロジー危機も、多くの人々を公的領域に係わらせ、街頭や集会に駆り立ててきたが、そこにも、物質文明の犠牲になりつつある山や河、水や空気、動物や生物一般への *compassio* の政治性を見ることはできないであろうか。さらに、われわれを否応なく政治的領域に引き出す第二番目の要因として、将来の世代に対する共同の責任感を挙げることができる。今日、人類は生存の場である地球を何十回となく破壊できる核兵器をもつに至ったが、われわれは、核の問題だけでなく、自然破壊や遺伝子操作の問題など、将来の人間と自然の環境に取り返しのでない打撃を与える危険に直面している。このような中で、われわれは、前世代の人間が想像すらできなかった将来の人類への大きな責任を保持していると言うべきであろう。こうした将来の世代への責任遂行こそ、現代に生きるわれわれを政治の問題へと駆り立てる一つの要因である。いずれの場合でも、政治をいわゆるプロに任せきる所には人類の前途はないであろう。もちろん、将来の政治におけるプロの役割はますます重要さを加えており、情熱、責任感、判断力の三つの資質を政治的指導者に求めたウェーバーの要求は、今なおその有意性を失っていない。しかし、一般市民といえども、政治をプロに委託することを通して政治的領域を放棄し、私的世界に埋没することは許されない。なぜならば、人類の未来を決める重要な政策決定は、今日でもなお最終的には、家庭や学校や会社やその他の小さな個別的な集団や組織でなされるのではなく、人間の生の包括的地平としての公的 = 政治的領域においてなされるからである。



---

次の問題(1 - 40)には、それぞれ a、b、c、...の答えが与えてあります。各問題につき、a、b、c、...のなかから、最も適当と思う答えを一つだけ選び、解答用カードの相当欄にあたる a、b、c、...のいずれかのわくのなかを黒くぬって、あなたの答えを示しなさい。

---

- I. 以下の問い(1 - 5)は、それぞれ二つの文章からなりたっている。最も適当なものを、a、b、c、d のなかから一つ選びなさい。
- a.(1)(2)ともに正しい。
  - b.(1)は正しいが、(2)は誤りを含む。
  - c.(1)は誤りを含むが、(2)は正しい。
  - d.(1)(2)ともに誤りを含む。

1.

- (1) プラトンは『国家篇』において理想国家のヴィジョンを描いたが、それはアテナイの民主制をモデルにした民主政治の理念を主張するものであった。
- (2) 紀元前五世紀の古代ギリシアのポリス、アテナイにおいて、自由を基礎づけていたものは、個人の権利に関する明確な思想でも、個人の人格的尊厳の思想でもなかった。

2.

- (1) 古代アテナイの民主制においては、国内における自由の擁護と、国外での飽くなき支配の追求との間に、何ら矛盾は感じられていなかった。
- (2) 一般的に古代世界において奴隷制は当然と考えられていた社会制度であり、「自由人」とは、特権階級的な意味合いをおび、「奴隷」の存在を前提とした社会的、法的、政治的地位を示すものであった。

3.

- (1) 古代アテナイの民主制において、自由は市民に対する共同体の権力を制限する原理というよりは、むしろ共同体を基礎づける原理であった。
- (2) 「政治が少なくなれば、それだけ自由は多くなる」("The less politics, the more freedom")という考え方ほど、古代アテナイの民主制のもとでの市民一般の感覚から遠いものはなかった。

4.

- (1) 歴史家ヘロドトスは、自由と平等こそ、民主主義者にとって至高価値を言い表わすものと考えた。
- (2) 紀元前五世紀および四世紀のアテナイの国内においては、権力政治のほいる余地はほとんどなく、それはごく例外的に見られたにすぎなかった。

5.

- (1) プラトンは、第一回シチリア旅行から帰国後、主として青年学徒のためにアテナイの近郊にアカデメイアを創設し、哲学を中心に、数学、天文学、音楽理論などの学科を学ばせた。
- (2) アリストテレスは、アテナイの全盛時代に生き、政治家としての実際的な仕事と、政治哲学者としての思索の両面を通じて、アテナイの民主政治の確立に偉大な貢献をなした。

II. 以下の問い(6 - 15)は、それぞれ資料の筆者の見解として二つの文章からなりたっている。資料に基づいて、筆者の見解として最も適当なものを、次の a、b、c、d の中から一つ選びなさい。

- a.(1)(2)ともに正しい。
- b.(1)は正しいが、(2)は誤りを含む。
- c.(1)は誤りを含むが、(2)は正しい。
- d.(1)(2)ともに誤りを含む。

6.

- (1) 国家秩序の安定度の目安となるのは、国家の保持する物理的強制力の大小というよりは、国家の権威が保持されている度合いである。
- (2) マキアヴェリは、いわゆる権謀術数の達人としての「マキアヴェリズム」の創始者ではなく、権力政治の実態をできるだけ客観的に分析しようとした最初の政治思想家の一人である。

7.

- (1) 政治は国家に特有のものではなく、およそ集合的生活が営まれる所には人間の行為現象としてどこにでも存在する。
- (2) 市民による政治は衆愚政治に陥る危険性が強く、特に今日的状況においてはこの危険性はますます強まっている。



8.

- (1) 近代の政治の自律性という考え方は、必ずしも政治が宗教や道徳に係わらないということの意味しない。
- (2) 近代の政治の考え方においては、政治には限定された通路というものはなく、そこには権力関係に影響を与える限り、利用すべきものはすべて利用するという考え方が支配的である。

9 .

- (1) 西欧の政治思想の伝統の中で積み上げられてきた思考や概念や見方は、それとは異なった政治風土にある日本の実情には適さない。
- (2) 今日の日本においては、政治よりも経済のもつ意義がはるかに重要であり、その意味では政治の重要性が次第に希薄になっているのも当然である。

10 .

- (1) 英語の power という概念に比べて、日本語の「権力」という概念はマイナスの意味合いを強くおびている。
- (2) 勢力均衡の原理は今日の国際情勢において悪用される危険性が大きいですが、しかし今日なお状況によっては、不正や不均衡の抑制として活用できる側面をもっている。

11 .

- (1) 今日の政治状況においては、かつてのように職業政治家による指導力は重要でなくなっている。
- (2) 今日の経済至上主義のまかりとおる状況においては政治に可能なことは限られてきており、その主たる課題は経済の必要性に答えていくことである。

12.

- (1) 政治権力の不可避性という事態は、近代国民国家の生成期においては確かに意味があったが、今日の政治状況においては意味を失っている。
- (2) テクノクラシーは、将来の政治のあり方としては不適切である。

13 .

- (1) 「政治的力」は、通常は「政治権力」とともに一つの統治現象の中に二重構造として現われるので、純粋な「政治的力」だけに基礎づけられた政治は、実際にはどこにもありえない。
- (2) 「政治的力」の概念は、現代の大規模社会においてはその意義を失っている。

14 .

- (1) 今日、公的 = 政治的領域の重要性は増大している。
- (2) 現代の政治において必要とされているのはロゴスではなくパトスであり、その意味で政治学的思惟の性格の転換が急務である。

15 .

- (1) 核兵器の出現や自然破壊などの危機症候群は、政治の本質に変更を迫る現代世界の危機の徴候にほかならない。
- (2) 将来の人類への責任遂行の行為としての政治は、職業政治家や官僚による政治の現代的地平であると同時に、現代の市民による政治の最重要課題の一つでもある。

III . 以下の問い(16 - 20)は、それぞれ一定の文章からなりたっているが、括弧に最も適当なものを次の a、b、c、d、e の中から一つ選びなさい。

16 . K . マルクスは、( ) において私有財産制のもとでの人間の疎外を鋭利に分析し、その回復の条件を提示した。

- a. 『哲学の貧困』
- b. 『人間不平等起源論』
- c. 『経済学・哲学草稿』
- d. 『国富論』
- e. 『政治経済論』

17 . 人権とは自然権として言い慣らわされてきたものの現代的な言い方である。それはまた「人間の諸権利」の十九世紀のおよび二十世紀の名称でもある。人権思想の権威としてしばしば言及される政治思想家( )は、これらの諸権利の基本を「生命、自由および財産」に対する権利と理解した。

- a. J. ロック
- b. ヴォルテール
- c. I. カント
- d. J. S. ミル
- e. G. イェリネック

18 . ( ) の世界観においては、究極的原理は天地、陰陽という自然の理であるが、それはまた君の臣に対する、父の子に対する、夫の婦に対するタテ型の有機体的秩序の理として、社会の原理、政治の原理となる。幾人かの日本政治思想史家は、そこに天皇制ファシズムの一つの精神的基盤を見いだした。

- a. 道教
- b. 朱子学
- c. 天理教
- d. 陽明学
- e. 日蓮宗

19. 市民運動や草の根運動に基づく( )は、政治のプロやエリートによる統治の一面性を抑制し、補完するために重要である。

- a. 人民民主主義
- b. 直接民主主義
- c. 自由民主主義
- d. 大衆民主主義
- e. 参加民主主義

20. ( )は、世界のすべての事象を説明しえるという知の装いをもつ。それは常に觀念の絶対論理として統一性、完全性を主張し、自らの体系を人々に課するという特徴をもっている。

- a. ユートピア
- b. シンクタンク
- c. イデオロギー
- d. 神話
- e. 魔術

IV. 以下の問い(21 - 25)は、それぞれ用語ないし熟語の意味に関するものである。その用語ないし熟語の特徴あるるいは関連を示すものとして最も不適切なものを、それぞれ次の a, b, c, d, e の中から一つ通びなさい。

21. 利益政治

- a. 国家有機体説
- b. 利害調整の政治
- c. 多元主義社会
- d. 自由主義的価値観
- e. 権力配分の論理

22. エコロジー危機

- a. スリーマイル島
- b. セクショナリズム
- c. テクノロジー・アセスメント
- d. 砂漠化
- e. 「宇宙船地球号」(K. ボールディング)

23. 管理社会

- a. 官僚制
- b. 組織化の時代
- c. A. ハクスリー 『すばらしい新世界』
- d. 「形式合理性」(M. ウェーバー)
- e. ドーナツ化現象

24. 権力のミランダ

- a. 国家建設神話
- b. 王権神授説
- c. 「賞賛すべき」、「驚異に値する」もの
- d. 軍歌
- e. 御真影

25. 行政国家

- a. 職能国家
- b. 福祉国家
- c. レッセ・フェール
- d. ニュー・ディール政策
- e. 社会保障制度の充実

V. 以下の問い(26 - 40)について、それぞれの設問に答えなさい。

26. 政治権力のメカニズムを人間の心理的契機から説明する手法を開発した政治学者はどれか。
- A. ド・トクヴィル
  - S. フロイト
  - H. D. ラスウェル
  - ソクラテス
  - R. ダール
27. 以下の思想家の中で民主主義思想の重要性を強調した思想家はどれか。
- プラトン
  - ヴェスパシアヌス
  - ハンニバル
  - エリザベス一世
  - J. J. ルソー
28. 以下の項目の中で必ずしも三権分立の原則と直接関係しないものはどれか。
- 日本国憲法
  - アメリカ合衆国の政治制度
  - 対抗権力の必要性
  - 立憲主義
  - 法の精神
29. 以下の項目の中で必ずしもカリスマ的指導者と直接関係しないものはどれか。
- 議会制民主主義
  - ウェーバー
  - 「神の賜物」
  - 支配の正当性
  - 英雄性や果敢な精神や弁舌の力への情緒的帰依
30. 以下の項目の中でナチズムと直接関係しないものはどれか。
- ホロコースト
  - テロル支配
  - 指導者国家

- d. ボルシェヴィズム
- e. 反ユダヤ主義

31. 以下の項目の中で資料の著者の言う「消費的自由」の意味内容に必ずしも関連しないものはどれか。

- a. 政治的行為というよりは経済的行為としての自由
- b. 消費者が自らを保護するために有害商品を告発したり、不買運動をしたりする自由
- c. 経済至上主義のイデオロギー
- d. 「万事は金」という価値観に基づく自由
- e. 消費生活の充実を至高価値とする消費者の自由

32. 以下の項目の中で資料の著者の言う「脱政治化」の意味内容に必ずしも関連しないものはどれか。

- a. citizenship（市民性）の危機
- b. 民主主義の形骸化
- c. 人民の政治参加が十分になされていない状況
- d. 政治の不在
- e. 市民の政治的力の減退

33. 資料の中でH. アーレントは、「近代の政治権力の奇怪さ」に光をあてたといわれている。以下の項目の中でその意味するものとして必ずしも適切でないものはどれか。

- a. 強制の契機
- b. 支配一被支配の関係
- c. 手段としての道具的性格の強さ
- d. 言論にはいっさい基礎づけられていないこと
- e. 権威との分裂の可能性

34. 資料の著者によれば、古代ギリシアのアテナイ・ポリス型の「政治的力」の概念は、近代の「政治権力」の概念ときわめて異質なものであった。以下の項目の中からその「政治的力」の意味ないし属性として必ずしも適切でないものを一つ選びなさい。

- a. 共同体に帰属する力
- b. 人々の相互の信頼を基盤とする力
- c. 自由な制度や組織を形成する力
- d. 非暴力的な力
- e. 経済的価値を実現するための道具としての力

35. 「金権政治」の記述として必ずしも正しくないものを、以下の項目の中から一つ選びなさい。
- a. 政治で金儲けができるような政治の仕組み
  - b. 政治を動かす主要なファクターが利権や金であったりする政治構造
  - c. 強者の言動が正義だという価値観に依拠した政治体質
  - d. 古代ギリシアの時代にさかのぼって見られる富裕な者が経済力に訴えて支配する政治体制
  - e. 議員が地元へ交付金や補助金や公共事業をもち帰ることが期待される政治構造
36. 資料の筆者の用語法の記述として誤りを含むものを、以下の項目の中から一つ選びなさい。
- a. 「権威」という言葉は、人民の「支持」や「同意」に裏づけられた力という意味合いで使用されている。
  - b. citizenship（市民性）には、市民が単なる権利の所持者ないしは受益者にとどまらず、政治を不断に創造する主体であるという意味合いが含まれている。
  - c. 「強制力」とは、人が他者を自らの意志にしたがって動かそうとする場合、他者の意図に反する仕方で他者を動かそうとする力である。
  - d. 「政治的自由」は、「内面的自由」と決して二律背反であるわけではない。
  - e. 支配の「政治権力」は上からの瞬発的な支配力においてすぐれ、それ故、潜在的な"puissance"としての性格をもたない。
37. 資料の著者の用語法の記述ないし意味づけとして誤りを含むものを、以下の項目の中から一つ選びなさい。
- a. 現代日本の平和主義の実態は「脱政治化された平和主義」として特徴づけられているが、著者はこの表現を価値中立的に使用しており、個人的な価値判断を留保している。
  - b. 著者にとって、「政治的なるもの」と「下からの政治的力」と「政治的自由」とは、三位一体的な統一体として理解されている。
  - c. 「軍事的解決」は、武力による即時的解決を意味する。それは言論に依拠しない解決法である。
  - d. 著者によれば、英語の"compassion"という用語は、日本語の「憐れみ」や「同情」のもつ語感と異なった響きをもつ。
  - e. 著者は、ラテン語の"compassio"という用語をルソーの「ピティエ」とほぼ同義語的なものとして使用している。

38. 著者の考え方と適合しないものを、以下の項目の中から一つ選びなさい。
- a. 日本国憲法にうたわれている平和主義の理念は、戦後日本社会の政治において十分に実現されているとはいえない。
  - b. 戦後の日本社会における政治のイメージの悪さは、一つにはその金権政治の体質の故である。
  - c. 今日、高度の政治的指導力と積極的な市民参加の政治の両方が求められており、われわれは決して両者の二者択一の問題をつきつけられているわけではない。
  - d. 政治権力の問題は近代の草創期ほどに重要でなくなっており、その限りで政治権力の統合機能は今日意味を失いつつある。
  - e. 今日の大衆社会においてさえも、社会全体を配慮する政治なしには経済の将来もないといえる。
39. 資料の著者の考え方として、またその延長線上にある考え方として最も適切なものを、以下の項目から一つ選びなさい。
- a. 古代ギリシアにおいて見られた「ポリス」と「家政」の分離は、今日でも実現可能で望ましいことである。
  - b. 今日の核の脅威のもとでは、地球的レベルにおける生存のための政治が、これまで以上に重要になってくる。
  - c. 政治的人間を「権力への内的欲求」をもった存在として理解する H・D・ラスウェルの考え方は誤りである。
  - d. 戦後日本の政治の最大の問題点は、政治のプロによる政治術の欠如であった。
  - e. 今日の日本の政治に最も必要なのは、政府主導に基づく国民の政治教育である。
40. このエッセイの題名として最も適切なのはどれか。
- a. **political power** の二つの伝統
  - b. 現代政治への一視角
  - c. 政治の重層構造
  - d. 経済至上主義の政治的影響
  - e. いま政治に何が可能か